【書評】

佐藤将之著『荀子礼治思想的淵源与戦国諸子之研究』

末永　高康

本書の著者は現在、台湾大学哲学系副教授であり、現代の『荀子』研究の最前線に立つ一人である。著者の『荀子』研究は“The Confucian Quest for Order: The Origin and Formation of the Political Thought of Xun Zi”（Leiden: Brill Academic Publishers, 2003、以下「前書」と称す）によって世界的に知られているが、本書はそれを継ぐものである。評者が本書を取り上げた理由は後に記すとして、まずは、本書の構成をその目次によって示しておきたい。

自序
導論
第一章　統治天下人民的帝王：『墨子』的「兼」与『荀子』
第二章　天人之間的帝王：『荘子』的「道徳」与『荀子』
第三章　教化人民的帝王：『管子』「経言」諸篇的「礼論」与『荀子』
第四章　具備神明的帝王：『管子』諸篇中的礼論与『荀子』
第五章　效法天地秩序和体現文明秩序的帝王：『呂氏春秋』的「理義」与『荀子』的「礼義」
第六章　『荀子』的「性」論与『韓非子』的人論
結論
附録　主要参考書目　索引　跋

本書の成立過程については、自序、導論、跋に明らかにされているが、二〇〇六年以降に著者が世界各地で発表した英文、中文の論考が本書の主たる材料となっており、前書以降の著者の『荀子』研究の展開と深化を示すものとなっている。ただし、前著を単純に受け継ぐものではない。前書が“ethical argumentation”（倫理論弁）対“analytical discourse”（分析論述）という枠組みの下で、『荀子』思想を両者の統合としてとらえるという、マクロな視点で構成されているのに対し、本書は上の目次にも明らかなように、個別の諸子思想家を単位として、その『荀子』に対する影響がミクロに考察さ

れていく。このミクロな考察を通じて、荀子が先秦思想の各派の思想を統合して、その「礼治論」を構成していく過程を詳細に描き出していくのが本書である。よって、自序にも謳われているように、前書に対する理解抜きでも十分に理解できるように配慮して本書は構成されているし、その問題意識は前書を受け継ぐものの、論考としては完全に前書から独立している。

前書から受け継ぐのは、荀子思想の核心を「礼」に見定め、それが荀子思想全体を統合しているのみならず、各派の思想を統合する媒介作用をしているとする視点である。この後者の統合をミクロに考察していく上で、著者がまず注目するのは、『史記』孟子荀卿列伝の「（荀卿）儒、墨、道徳の行事興壊を推す」である。司馬遷の目に映る荀子思想が「儒」「墨」「道徳」を統合するものであったことを確認した上で、その「墨」における統合が第一章で、「道徳」における統合が第二章で論じられる。

第一章では、さらに『韓非子』五蠹篇の「今、儒、墨皆な先王兼て天下を愛すと称す」を引いて、韓非の理解する儒家思想には「兼愛」が含まれていたことを手がかりにして、『荀子』中の「兼」と「兼愛」概念について検討が加えられていく。著者も指摘するように、荀子と墨家の関係についての従来の研究は、多く名実論と論理思想の枠内にとどまっており、「兼」概念を中心に両者の関係を論ずるのは本論をもって嚆矢とする。『荀子』中には七十六箇所に「兼」字が見え、先秦秦漢文献では『墨子』の百三十二箇所に次ぐ多さであるという単純な事実についてさえ、著者以前にこれを強調した者はいない。『荀子』中には「兼愛」の例も二箇所あって、それがともにプラスの価値において語られていることや、『荀子』が繰り返し墨子を非難するにもかかわらず、そこで「兼愛」に触れられていないことを思えば、ここに従来の研究の盲点があったことは間違いないであろう。

著者はまず渡邊卓氏等による従来の研究における『墨子』各篇の編年を批判して、十論の成立が荀子以前に遡ることを示す。渡邊説は「天志」「明鬼」等の主張を秦墨と結びつけ、戦国最末期以後の成立であるとしているが、『墨子』明鬼篇と深い関係を持つと考えられる上博楚簡『鬼神之明』の出現は、著者の言う如く、その説がもはやそのままでは成り立たないことを示している。現在の資料状況よりするならば、十論の口号の成立（十論各篇の成立ではない）を荀子以前に置く著者の主張は認められて然るべきであろう。その上で著者は、「兼」概念が、墨家の各種主張に一貫した体系性をもたせるはたらきをしていると指摘する。

著者が特に注目するのは、「兼」字が加えられることによって、ある行為の対象が天下の人民全体に拡大されるという点である。たとえば、兼愛上中篇に見える「相愛」では相互の愛に過ぎないものが、兼愛下篇の「兼愛」では王者の天下人民に対する愛となっていると著者は言う。そこで、『墨子』中の「兼」の全用例を検討して、「兼」が付け加えられる行為の主語は「天」または「天子」に限ること、またその主語が「天子」の場合、それが天下の人民全体に対する行為となり、同時に「天」に対して責任を負う、「天」の代理として行う行為となっていることを示す。そして、この「兼」の概念のもとに、「天」の代理として、天下の太平を達成する「天下の

君」という統治者の青写真が、荀子以前の墨家によって描かれているとする。そこに描き出されているのは理念としての「天下の君」である。

この墨家が提示した「兼」の概念を荀子が取り入れていると、著者は考える。『荀子』の用例においても、「兼」が語られるのは、多く、理想的な統治者である「天下の君」についてである。「兼」の概念によって、その統治者が、現実における「一国の君」から理念的な「天下の君」に引き上げられているわけである。この「天下の君」となる方法として、荀子はさらに「礼」を語る。『墨子』の「兼」が、理念としての「天下の君」を示すに過ぎず、「天下の君」となる具体方法を欠いていたのに対し、『荀子』は「礼」を語ることによって、その方法を具体的に示すのである。また、この方法が人間的秩序を構成する「礼」によって語られることによって、『墨子』中の「兼」における、「天」との結びつきが切り離されることになる。墨家の「兼」概念と、それによって示される理念としての「天下の君」を受け継ぎつつ、それを礼治論の枠組みの下で語りなおしたものとして、著者は荀子思想を解していくのである。

つづく第二章では、「道徳」「徳」をキーワードにして、荀子思想がどのように『荘子』思想を消化しているのかを論じている。著者はまず、「道徳」という熟語が先秦文献では『荘子』（十六例）と『荀子』（十二例）においてのみ十例以上あらわれ、『管子』の八例を除けば、他の文献にはほとんど用例が無いことを指摘する。『老子』や『韓非子』解老、喩老においても「道徳」の用例が無いとする指摘に、いささかの驚きを覚えるのは評者だけではないであろう。著者は『史記』荀卿列伝において「儒、墨、道」ではなく「道徳」となっている点にも注目して、「道徳」と「徳」の概念を中心に『荘子』―『荀子』の思想的関係を分析していく。

そこで、まず、『論語』『孟子』郭店楚簡（『老子』を含む）における「徳」の用例を検討し、そこでの「徳」は、基本的に個人の倫理状態を表すものであり、その「徳」を持つものによる統治が理想の統治として語られていることを確認する。その上で、『荘子』においては、儒家等の語る伝統的な「徳」に対する批判がなされると同時に、「万物を発生あるいは発育させる根源的なエネルギー」としての、あらたな「徳」概念が展開されていることを示す。天地はこの「徳」を有するが故に万物を生成し得るのであり、この「徳」を備えた人物は「天地とならび得る生成力」を発揮することになるのである。この『荘子』によって提起された新たな「徳」概念を荀子が受け継ぐと、著者は考える。

儒家における「道徳」の用例は『荀子』にはじまるわけであるが、それが『荘子』と同様、「万物を生成する力」であり、それを有するものが万民を服従させ得るものとしての側面を持つものであることを著者は確認し、さらに、その用例の多くで「道徳」が「礼」と共起していることに読者の注意をうながす。また、一方では『荀子』の「道徳」が伝統的な儒家における「修身の最高境地」「理想の統治」の代名詞でもあることから、ここに伝統的な「徳」概念と『荘子』による新たな「徳」概念との統合を読み取り、この統合の要に「道徳」の境地に至る方法としての「礼義」があると考える。「道徳」に至る具体的な道筋がこの「礼義」によって提供されるこ

とによって、『荘子』の「道徳」「徳」における「天（地）」への志向性が解消され、「道徳」「徳」が「天地の間」（すなわち「人」の範囲）に限定されることになるのである。

荀子思想に対する道家思想の影響の存在は従来から指摘されていたが、それはほぼ認識論と天人観の領域に限られていた。「道徳」「徳」において、『荘子』の影響を指摘する論は、著者以前には存在しない。本論は荀子研究における新たな領域を切り開くものであると言えよう。

第三、四章においては、『管子』の礼治論の荀子思想に対する影響が分析される。『管子』―『荀子』の関係については、『管子』立政篇の「修火憲」以下の約二〇〇字が『荀子』王制篇と重複し、両者の先後関係が問題とされるのを除けば、これまでの研究の範囲は、基本的に所謂『管子』四篇（心術上下、内業、白心）との思想的関係に限られていた。『管子』自体についても、従来、その「道」「法」思想や、その経済思想が中心的に論じられており、その礼治論を正面からとりあげた研究はほとんど存在しない。それに対して、著者は『管子』中に相当完備した礼治思想があるとして、それこそが荀子の礼治思想の主要な来源であり、一種の「原型」(proto-type)であるということを論証していく。

この部分が二章に分けられているのは、まずは『管子』の経言諸篇を取り上げ、この論証の見通しを立てているからである。今本『管子』テキストの複雑性を考えるならば、これは妥当な手順であろう。著者も言うように、経言諸篇は、『管子』中で最も古く成立した部分と考えられ、『荀子』以前のものであることがほぼ確実であり、かつ、その思想は『管子』全体の思想をある程度代表するものと考えられるからである。

第三章では経言諸篇の前半の五篇が各節において順番に取り上げられ、その荀子礼治論との関係が論じられていく。まずは『管子』冒頭の牧民篇の思想が分析され、この篇の関心が国家の富強と国家の安定の方策にあるとされる。荀子礼治論と関係するのは主としてこの後者である。牧民篇においては、人民が倫理化され、適切な社会的役割を与えられることが国家安定の条件であるとされ、それが国君による「四維」（礼、義、廉、恥）すなわち広義における「礼義」の率先的な遵守による「自立自規」の人民の養成を通じて達成されると考えられている。著者はここに荀子礼治論との類似性を読み取っていく。以下の諸篇の分析について逐一紹介することは避けるが、著者によれば、牧民篇の関心である「国土開発」（国家の富強に関する）と「人民管理」（国家の安定に関する）がまた経言諸篇全体の思想の二大支柱であり、その後者において、「刑法」の強制は長期的に国家を安定させるものではなく、「礼義」による人民の倫理意識の涵養が必要であると説かれている。また、特に権修篇・乗馬篇においては、限られた資源をどのように適切に社会構成員に分配するべきかの問題が取り上げられており、著者はこれらの点などに、荀子礼治論の先蹤となるものを見出していく。

なお本章の分析においては、単に礼思想上の類似が指摘されるだけではなく、語句のレベルでも影響のあったことが実証的に論じられている。たとえば、『管子』形勢篇冒頭部の「山高而不崩、則祈羊至矣。淵深而不涸、則沈玉極矣」と『荀子』勧学篇の「積土成

山」「積水成淵」との類似を指摘して、荀子が形勢篇を利用してその「積善」修身論に組み替えたものであることが論証されているし、また、『管子』立政篇と『荀子』王制篇の重複文についても、前者が後者を襲ったとする羅根沢説を駁して、前者が一国の「国土開発」に関する官職の配置を述べたものに過ぎないのに対し、それを天下の物質と人民の風俗を管理する官職の配置の文章に改めたものが後者であると導いている。これらの例を通じて、荀子が『管子』を「材料」として、いかに自己の思想をより豊富なものにしているかを、著者は提示していくのである。

つづく第四章では、経言諸篇における分析を『管子』全書の礼治思想に拡大していく。なかでも著者が注目するのは、『管子』君臣上・下篇である。これまでほとんど研究の俎上に載せられることのなかった両篇であるが、ある種の理論的な系統性を備えた治国論を展開しているものとして、著者はこれを高く評価する。著者によれば、両篇全三十五段の思想は、経言諸篇の「教化は刑罰より優先されねばならない」「国君の挙措は民衆の教化を達成する鍵である」を出発点として、統治者、被統治者の国家運営上の役割を探求し、特に「礼」の概念によって、統治者、被統治者が身体の如く「有機的」な相補関係にあることを示したものである。特に、上篇の主題は「君臣」の分業（各社会構成員の役割分担）にあり、下篇はさらに国家成立の起源、「礼」の国家運営における役割が主題とされており、荀子礼治論における主要な論点が先取りされている。

その荀子礼治論との関係を論じていくに際して、著者は、君臣上下篇において、ある種、人類の能力を超越した「神明」の語によって、「礼」の国家運営上における不可欠な功能が形容されている点に注目し、その分析の範囲を「神」「神明」の用例に広げていく。そして、『荀子』においても、「礼」にもとづく理想的な統治状態が「神」によって形容されるのみならず、いまだ『管子』には見えていない、「積善」等の修養によってその「神」なる功能を発揮するという考えを荀子が示しているとして、荀子思想における神明論の深化を論じている。本章の題が「具備神明的帝王」となっているのは、それ故である。

以上の章が、荀子礼治論における先行思想の統合を論ずるものであるのに対し、第五章は荀子とほぼ同時代に成立した『呂氏春秋』における「理」「義」論を取り上げ、『呂氏春秋』における統合とは異なる、荀子における各派思想の統合の特徴を浮かび上がらせている。その論述に際して、著者は『呂氏春秋』に頻出する「理義」の語が『荀子』にはまったく現れず、逆に、『荀子』に頻出する「礼義」の語が『呂氏春秋』にはまったく現れていないことに読者の注意をうながす。漢籍文献の検索サイトで「礼義」を検索して『呂氏春秋』の用例がまったくヒットしなかったことに驚いた経験は評者にもあるが、これを単なる驚きに終わらせずに、その背後にある思想史的な問題をえぐり出しているところに著者の力量を感じさせる。

さて、著者はまず、『呂氏春秋』は単なる各派の思想の寄せ集めではなく、そこには思想的統合性が存在すること、そしてその統合の核に「理」および「理義」の概念があることを論じていく。『呂氏春秋』の体系の根底に「理」が存在することは、著者の指摘する

ように、つとに赤塚忠氏等によって指摘されているが、『呂氏春秋』全用例の精査を通じて、著者はこれをより説得力を持つ主張へと高めている。なかでも注目すべきは、十二紀の序と目される序意篇の分析であろう。著者は「文信侯（＝呂不韋）曰」以下の部分を、「天―地―人」の秩序を達成することの重要性を主張する部分と、この秩序を人間界において達成する鍵として「理」の意義を主張する部分とに切り分ける。そしてこの「二重構造」の前者に「黄帝の学」を中心に据える呂不韋自身の思考が、後者に「理」と「理義」によって『呂氏春秋』全書を貫通せんとする編者の思考が反映されているとする。この編者によって「黄帝の学」を中心とする各派の思想が「理」「理義」の概念の下に統合されたものが『呂氏春秋』であると著者は考えるわけである。よって、ここで志向されるのは、「天―地―人」を一貫する秩序である「理」「理義」を人間界において実現していくことであり、天下を統一する帝王の見取り図もまたこの上に描かれることになる。

それに対して、荀子は「理」を多く語っても、『呂氏春秋』のような至高の価値をそこに置かない。『荀子』の用例においても、「理」は天地や人間界における秩序をあらわすが、天地人を貫く究極的な法則としてではなく、それぞれの場における秩序性として限定され、特に人の世界における秩序は『呂氏春秋』には見えない「文理」の語によって語られている。この「文理」の語は先秦儒家文献においても『礼記』に二例見えるに過ぎず、『荀子』においてこの語が多用されることは、この語の荀子思想における重要性を暗示していると著者は指摘する。かつ、『荀子』の用例において「文理」と「礼義」は不可分である。荀子における「文理」とは人類特有の倫理文明の原理であり、これは社会の各層が「礼義」にしたがうことによって建設されるものであり、この「文理」の建設によって人は天地とならぶ存在意義を持つことになる。『呂氏春秋』において、人類社会の秩序状態が「理義」によって語られ、それが天地の規律の秩序性に倣ったものであったのに対し、荀子は「文理」によって人類社会固有の秩序状態を語り、「礼義」によって実現されるその秩序性を以て人は天地とならび立つと考えるわけである。

最終の第六章は、荀子―韓非子関係を再検討するものである。韓非子研究においては、荀子との師弟関係を根拠として、その人間観と荀子性悪説との関係が論じられることが多いが、著者はこの論じ方には問題があるとする。そこで張涅「論韓非与荀子思想伝承関係」における『史記』の「事」字の用例分析――『史記』において師弟関係や学術の継承関係が語られる時には「師」「学」「受業」が用いられ、「事」は用いられない――を援用して、著者は、『史記』韓非伝の「（韓非）李斯と倶に荀卿に事ふ」がその師弟関係を保証するものではないことを導く。さらに『韓非子』全書の「性」字の用例を検討して、韓非子の人間観は直接的には「前期法家」および稷下の田駢、慎到の「人性自私」の人間観に由来し、荀子の性悪論に由来しないことを示していくのである。本章は荀子思想の後代への影響を論じている点で他章とはやや毛色を殊にしているものの、荀子思想の一面を照らし出すものとして、また同じく先秦諸子と荀子との関係を論じたものとして本書に収められたものと思われる。

「結論」においては、本書で得られた成果が手際よくまとめられ

るとともに、荀子礼論の思想史的意義が再確認される。ここで著者は、「礼論」（広義）を、①「礼論」（狭義）――個別の礼についての解釈や適用についての議論、②「礼制論」――国家制度としての礼についての検討と解釈、③「礼治論」――秩序を構成する原理的問題にかかわるものとしての礼の議論に区分する。その上で、荀子礼論の最大の貢献をこの礼治論の部分に見出し、荀子の礼治論を経て、「礼」が「天地宇宙のなかで、全人類が理想的な生存方法を構成する上での規範」としての意味を得たとする。そして、この意味での「礼」が漢代以降の国家や社会の姿を規定していったとして、著者はここに荀子礼論の思想史的意義を見出していくのである。

さて、上に概観した内容からすでに明らかであるが、本書はまさに荀子研究における新たな研究領域を切り開いたものであると言える。従来の研究においても、荀子は、先秦諸子思想の統合者として位置付けられていたが、その統合の具体的な形を示した研究はほとんど存在しない。また、先秦諸子の荀子に対する影響も、著者が指摘するように、これまでは限られた領域において論じられていたに過ぎない。

これは主として資料の制約による。従来、荀子以前のものとして認定されてきた諸子文献は非常に限られていた。この限られた資料によって、荀子当時の諸子思想の詳細を知ることは難しい。荀子による諸子思想の統合を論じようとしても、それを具体的に論じていくことがそもそもできなかったのである。

近年の新出土資料の出現がこの状況に変化をもたらすことになる。馬王堆漢墓帛書や銀雀山漢簡の出現がその先鞭をなすが、この状況が決定的に変わってくるのは、郭店楚簡や上博楚簡等の戦国簡の出現によってである。これらの新出土資料は、それ自身が荀子以前のテキストを提供するとともに、その出現は伝世資料の成立年代に対する既存の説の根本的な見直しを迫っている。『老子』や『礼記』諸篇の一部など、従来は荀子以後の成立と考えられていたテキスト（の一部）が荀子以前のテキストとして出現してきたからである。本書が新出土資料を直接用いている部分は少ないが、本書の研究もまた、新出土資料の出現を契機とする、資料年代推定の見直しの上に立っている。第一章がその典型であろう。渡邊卓氏の研究を代表とする、戦後日本の墨子研究の主流において、十論の各論は長期にわたって順次成立してきたものとされ、その口号の一部は戦国最末期以降の成立であるとされてきた。この見解の下では、著者が展開するような、十論を統合するものとしての「兼」という視点は得られない。そこで、『鬼神之明』等を援用しつつ、渡邊説を退けて、新たな墨子―荀子関係論を論じていくのである。第三、四章の『管子』との関係を論じる部分も、そこで言及される新出土資料は主として馬王堆帛書の『黄帝帛書』（『黄帝四経』）であるが、近年の『管子』研究における資料年代推定の見直しを背景とするものであると言えよう。

もちろん、荀子以前と目される資料が増えたからといって、それだけで諸子思想に対する荀子の統合の姿がただちに明らかになるわけではない。『墨子』の「兼」に、『荘子』の「道徳」に、『管子』の「礼」に注目していくのは著者ならではの視点である。この視点

を得る契機に、各テキストにおける術語の出現頻度の比較があったのは、本書の論述からいって間違いないであろう。ただ、二つのテキスト間における術語の出現頻度の類似は、両者間の必然的な関係を示すものではない。そこで「兼」なら「兼」、「徳」なら「徳」といった概念語の両テキストにおける用例をすべて精査して、両者の関係を固めていくというのが著者のスタイルである。この術語の出現頻度を足がかりにしてテキストを分析していくというスタイルは、本書の各章における論述の説得性を高めているが、それが最も成功しているのは第五章であろう。『呂氏春秋』と『荀子』では「義理」と「礼義」が排他的にあらわれるという指摘だけでも十分にインパクトを持つが、この頻度分布の背後にある両者の思想統合の差異が、その用例分析を通じてあざやかに描き出されている。

それに比べると、第一章の分析などはやや明晰さを欠くように思われる。『墨子』において「兼」が術語化され、特に兼愛下・非攻下等の篇において「別」と対比される「兼」が高度に術語化されたものであるのに比して、『荀子』における「兼」が十分に術語化されているようには見えないからである。確かに、著者が言われるように、「兼＋（動詞）」の用例において両者の間に類似性が存在し、ここに墨家思想の荀子思想への影響が認められると考えられるのではあるが、これを荀子による墨家思想の統合の証とまで見なしてよいものかどうか。荀子が墨家の「兼」を意識的に取り入れているのであれば、荀子の語る「兼」がもう少し高度に術語化されているか、墨家の「兼」に相当するものがより包括的な術語によって語りなおされていてもよさそうに思えるのである。この部分で荀子における統合があったとするには、やや論証に不足する点があるのではないだろうか。

とはいえ、このことによって、墨子―荀子関係において「兼」に着目した本論の価値が大きく損なわれることはないであろう。『荀子』で「兼愛」が語られ「兼」が多用され、兼愛において墨家非難を行っていないことは事実であり、ここに思想史上の問題があることを見出したのは、本論が最初だからである。新たな問題の発掘は、既存の問題の解決に劣らない価値を持つ。第二章以下も同様で、「道徳」「徳」における道家思想と荀子の関係、礼治思想における『管子』と荀子の関係等も、今後、荀子思想を研究していく者が、あらたに取り組まなければならない課題を提起しているといえよう。

そして、これは単に荀子思想研究の領域に止まらない。『墨子』研究、『荘子』研究、『管子』研究、『呂氏春秋』研究、『韓非子』研究のそれぞれの領域においても、本書はあらたな問題領域を切り開いている。特に、『管子』研究において、その礼思想研究の重要性が提起された点は大きいであろう。われわれは金谷治氏による包括的な『管子』研究を手にしているわけであるが、氏の『管子の研究』（岩波書店、一九八七年）においてもその礼思想が主題化されることはないし、そもそもこの書の事項索引では「礼」が取り上げられていない。『管子』の礼思想の研究はこれまでほとんど手付かずの状態だったのである。本書はあくまで荀子との関係に主眼をおいて論述されているが、『管子』の礼思想それ自体が思想史研究の素材として興味深いものであることを同時に示している。非儒家思想における礼思想と儒家思想における礼思想との関係はさらに追求

されるべき問題であろう。本書が呼び水となって、この領域における研究がさらに深化していくことを期待したい。

また『呂氏春秋』の序意篇における「二重構造」の指摘も、この「二重構造」が真に存在しているか否かを含めて、今後の議論を呼び起こすものと言えよう。その存在を認めるか否かは、十二紀ひいては『呂氏春秋』全体についての理解に大きな影響を与えるからである。『韓非子』研究においても、本書以後においては、その荀子との関係を自明視したところから研究をはじめることはもはやできなくなったと言える。本書で示された見解が、今後そのまま主流の見解として定着していくか否かは評者の予見できるものではないが、これらの問題領域を切り開いたものとして、本書が常に参照されるべき価値を持ち続けることは間違いないであろう。

参照価値と言えば、ついでながら、各章において関連する問題についての研究史が簡潔にまとめられている点も大変ありがたい。著者は戦前の日本の研究にも十分に目配りをしていて、西脇玉峰「荀墨の異同」（一八九六年）、岡本正道「荀子と道家思想」（一九三六年）といった、現代の日本の研究者がほとんど手にすることのないような論文までもが視野に入れられている。また、欧文で書かれた研究についての言及が多いのも本書の特徴で、本書を読むことによって当該領域における欧米での研究の梗概を知ることができる。もちろん、中国語圏における研究が十分に咀嚼されていることは言うまでもない。特に「導論」における、「礼」思想研究史の概括は、日本、中国語圏、欧米における研究の流れがコンパクトにまとめられていて、「礼」の問題に関心を持つすべての読者にとって有益であろう。

さて、先秦思想の各領域を横断して論じている本書の全体に対して適切な批判を与えるのは評者のよくする所ではないが、評者の務めとして、最後に評者の感じた若干の疑問というか違和感を記しておきたい。これは主として第二章に関連する。

『荘子』の「道徳」「徳」概念が影響している部分として、著者が特に注目するのは、『荀子』不苟篇の「君子養心莫善於誠（君子、心を養ふに誠より善きは莫し）」から始まる一段である。『荀子』の中で唯一「誠」が主題化されている部分で、『礼記』中庸篇との関係で論じられることが多い部分である。確かに、著者が指摘するように、この部分における「徳」は、『荘子』で示された「万物を発生あるいは発育させる根源的なエネルギー」としての「徳」に類似したものとして語られており、この部分に見える「誠」「神」「独」等についても『荘子』の内に類似した用例を求めることができるのであるが、平静に見て、この部分はやはり中庸篇の影響によるものと考えるべきではなかろうか。中庸篇で「誠なる者は自ら己を成すのみに非ざるなり、物を成す所以なり。己を成すは、仁なり。物を成すは、知なり。性の徳なり、外内を合するの道なり」と言われるときの「徳」など、まさに「万物を発生あるいは発育させる根源的なエネルギー」と直結するものであるし、「誠」「神」「（慎）独」もまた中庸篇に見えるタームだからである。

従来の研究において、中庸篇の成立は荀子以後に置かれることが多く、著者もあるいはこの見解に従われているのかも知れないが、

中庸篇冒頭部と類似した議論は郭店楚簡『性自命出』(上博楚簡『性情論』) にも見えており、中庸篇の成立年代については現在見直しが行われている。中庸篇で特徴的な「慎独」の語もまた郭店楚簡『五行』にすでに見えているし、現在の資料状況からすれば、中庸篇の成立を荀子以後に引き下げる必然性に乏しいのである。あるいは、『性自命出』や『五行』には「誠」の用例が見えないことを根拠にして、「誠」を説く中庸篇の成立を引き下げて考えられているのかも知れないが、「誠」字を含む中庸篇との並行文が『孟子』離婁篇にすでに見えているし、「誠」字によってではないが「信」字によって天地の「まこと」を語る文章は郭店楚簡『忠信之道』に見えている。テキストとしての中庸篇の成立年代はしばらく置くとしても、中庸篇に見えるような思想の成立が荀子よりも下るとは考え難い。『荀子』不苟篇の当該部分と中庸篇との類似は一見して明らかであるから、これが『荘子』思想の影響下で記されたものであるといわれても、にわかには信じ難いのである。「万物を発育させる力」としての「徳」概念や、「誠」の説は、荀子による道家思想の統合の証拠として見るよりは、儒家思想の展開の内でとらえるべきものではなかろうか。

第三章、第四章の論述に対しても同様の疑問を感じる。『管子』の礼論が荀子に影響を与えているのは、著者の論証の通りであるとしても、その影響が著者が言われるほどに大きなものであったのかどうか。荀子礼論は『管子』の礼論の延長上に位置づけられるべきものというよりは、やはり、儒家の礼論の延長上に位置づけられるべきもののように感じられるのである。著者が『管子』礼論と荀子を直結する背後には、本書では表面的にあらわれていないが、前書の「倫理論弁」対「分析論述」という枠組みがあると思われる。著者は荀子以前の儒家の議論を「倫理論弁」に属するとし、稷下学士による「分析論述」の展開を受けて、両者を統合したものとして荀子思想を位置づけている。『管子』の主要な部分は稷下学士の手になるものと考えられるから、その「分析論述」による礼論の荀子への影響を本書で詳細に論証していくのである。もちろん、著者もまた儒家における礼の議論が荀子に与えた影響を無視するものではないが（これは前書に明らかである）、本書においてはその部分についての具体的な論述がないので、『管子』からの影響が過大に評価されているように見えるのである。

もっとも、これは荀子思想における他学派思想の統合を論ずるという本書の目的の然らしむる所であって、本来問題とすべきものではないのかも知れない。ただ、評者が本書を手に取ったそもそもの動機が、儒家礼論の展開における荀子礼論の位置を知りたいという点にあったので、この部分についての論述が欠けていることを遺憾に思うのである。本書の題の「荀子礼治思想の淵源」には当然、荀子以前の儒家礼論が含まれなければならないし、その「戦国諸子」にもまた儒家が含まれなければならないはずである。近年の新出土資料は、『礼記』諸篇の成立がこれまで考えられていたよりも早い可能性、その少なからぬ部分が荀子以前の成立である可能性を示唆している。これまで漠然と荀子以後に置かれていた資料が、荀子以前に置き直されるならば、儒家礼論における荀子の位置づけもこれまでと異なるものになろう。この新たな位置づけについての議論が

展開されていると思って、本書を読み始めたのであるが、この期待は裏切られてしまうことになったのである。ではあるが、本書を通じて評者が得たものは、この裏切られた期待を補って余りある。荀子思想のみならず、先秦諸子思想に関心を持つより多くの人々が繙くべき一冊として、ここに取り上げた次第である。

なお、著者の話によれば、前書の中国語版がまもなく出版されるとのことである。本書を理解する上で前書に対する知識は特に要求されていないが、やはり本書とあわせ読まれることが望ましい。英文を読むのに骨が折れる読者にとっては朗報である。著者には他に『中国古代的「忠」論研究』（台大出版中心、二〇一〇年）なる研究書がある。先秦文献における「忠」の用例を丹念に分析して、「まごころ」としての「忠」が君主に対する「忠」に限定され転化されていったとする通説を覆している。この書もまた先秦思想を学ぶ者の必読の一冊であろう。

二〇一三年一二月　台北　台大出版中心
A五判　一四＋三五一頁　新台幣三五〇元整